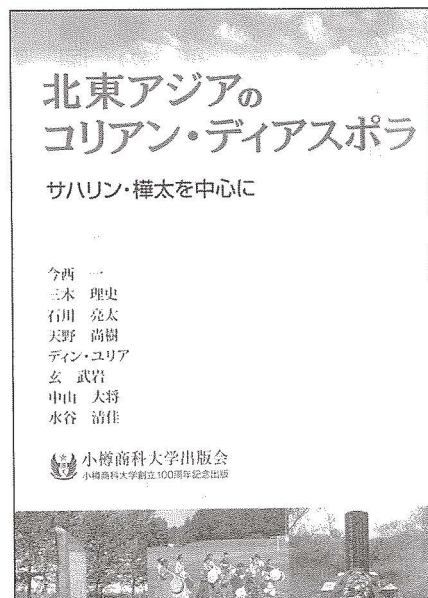


今西 一編著

『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』

小樽商科大学出版会 二〇一二年

【ISBN 978-4-87738-403-6】



この度、『北東アジアのコリアン・ディアスポラ―サハリン・樺太を中心に』という本を編集して、本学出版会から刊行した。予想外の好評で、朝日新聞や北海道新聞からは取材に来て、記事にしてくれた。また、韓国国家記録院の人たちが訪ねてきて、日本、韓国、ロシア、中国で協力して、サハリンの残留韓国・朝鮮人の調査や資料保存ができないかとい

う相談を受けた。その窓口のひとつに小樽商大もなってくれないか、という話であった。今まで、戦前の樺太に朝鮮人の「強制連行」があり、現在でも三万人弱の韓国・朝鮮人が、サハリンに住んでいることを、どれだけの日本人が知っていたのだろうか。私も、二〇〇八年の春に日露国際セミナーの「サハリン、植民の歴史的な経験」というシンポジウムに団長として参加し、同年の秋に韓国の漢陽大学の「多文化主義」についての共同シンポで報告した帰り、偶然にも安山市の「故郷の村」に立ち寄って、この問題の重要さを知ったのである。

安山市は、ソウルから一時間ほどの工場都市であるが、それだけに外国人労働者の人口比率が韓国で一番多く、「多文化共生」のモデル地域になっている。「故郷の村」には、一千人ほどのサハリンに残留した韓国人の高齢者たちが住んでいる。同所は、〇〇年二月に日本政府も援助金を出して造った集合団地である。私

たちは、早速科学研究費を申請して、〇九年に同団地に聞き取り調査に入った。そこで戦後、サハリンに残留した韓国人、二〇人ほどの男女から、その生活史を聞き取った。その成果とサハリン調査の結果を、本書にまとめることができた。

一九二六年には約四千四百人しか住んでいなかった朝鮮人が、四六年には二万五千人住んでいたという。この急増は、「強制連行」によるものが圧倒的である。しかも、「強制連行」された人びとは、日本人が敗戦後、サハリンから日本に戻れたのに、密出国でもないかぎり、サハリンからは帰れなくなった。

当初は、彼らはソ連の国籍を取ることが認められるが、四八年に朝鮮人民民主主義共和国が成立すると、北朝鮮の国籍を取ることが奨励された。しかし「無国籍」を選択した人びとが七〇年代でも七千七百人弱いた。この「無国籍」者は進学や就職でも大きな差別を受け、モスクワ大学まで出た「故郷の村」の高昌男会

長（調査後に逝去）でさえ、移動の自由がなかったことを厳しく批判している。

「平等」を標榜していた社会主義サハリンでも、中央アジアから来たソ連系朝鮮人（「高麗人」と呼ばれていた）、北朝鮮からきた朝鮮人、戦前から在住した朝鮮人との間に差別があり、わずか朝鮮人人口の五％に満たない「高麗人」が、支配エリートとして、社会主義が崩壊するまで君臨していた。最近でも、韓国に永住帰国することを望む人びとが数千人、「故郷の村」の空きを望んでおり、戦時下の郵便貯金の返還を求める訴訟も起きている。日本の「植民地責任」の問題は、まだまだ終わってはいないのである。

本の表題に「ディアポラス」という難しい言葉を使っているが、これはギリシヤ語で「離散民」を意味している。朝鮮の人たちは、一九二〇年代の土地調査事業以降、人口の四分の一以上の人びとが海外に離散する。日本人も、戦後は六百万人以上の人たちが海外から引き揚げて

きているがこのように移動し、離散した家族の歴史に、最近やつと光があたるようになってきた。私たちの研究も、そのひとつの捨て石になればと考えている。

本学特任教授 今西 一